論文の内容の要旨

論文題目　　19 世紀南中国におけるプロテスタント布教の発展と「開港場知識人」の誕生

――洪仁玕と『資政新篇』の位置づけをめぐって――

氏名　　倉田明子

本稿はアヘン戦争後に現れた新たな開港場、特に発展の度合いが高かった上海と香港に注目し、そこで展開されたキリスト教（プロテスタント派）布教の影響下に誕生した新しいタイプの中国人知識人層の様相を、洪仁玕という人物を軸に描こうとするものである。

本稿では、4 つの課題を設定した。第一は、まだ未開拓の部分が多く残されている初期（1807 年～1860 年前後）の中国プロテスタント史の再構成で、個々の宣教師や伝道会の活動を可能な限り俯瞰的にとらえてゆくと同時に、宣教師たちのもとで信徒や助手として布教活動を支えた中国人たちにも目を向けることを試みた。次にキリスト教との関わりを視野に入れた洪仁玕像の再構築を課題とした。洪仁玕は太平天国運動に 1859 年になって合流し、その後政治指導者となった人物だが、彼とキリスト教との関係についての研究はあまり進んでいない。本稿ではキリスト教徒としての洪仁玕の姿を明らかにし、その上で南京合流後の洪仁玕とその代表的著作である『資政新篇』について再検討を加えている。そして第 3 の課題は、「開港場知識人」の誕生と台頭の跡づけである。洪仁玕と同じように 1850 年代前後の香港・上海で宣教師の影響下に西洋知識を得た知識人は少なくなかったが、本稿では彼らを「開港場知識人」としてとらえ、その誕生と、洋務運動や香港の中国人社会を含むさまざまな場において見られた開港場知識人たちの台頭を跡づけようとした。その上で、第 4 の課題として近代化の流れにおける洪仁玕の位置づけの再検討を挙げている。第 2 点、第 3 点の課題についての検討を踏まえ、19 世紀初頭以来多方面で展開されてきた欧米との交流とそこから洋務運動へとつながる流れの中で開港場知識人が果たしてきた役

割を検討しつつ、そこに洪仁玕をも位置づけることを試みた。

本論は 7 章から構成される。

第 1 章においては、プロテスタント布教が開始された 1807 年から南京条約締結までの時期のプロテスタント史を概観した。南京条約によって開港場が開かれる以前のこの時期の宣教師たちにとって、中国内地での活動場所はわずかに広州のみであった。その広州とポルトガル領マカオで限定的ながら展開されていた布教活動を中心に、また、同時進行的に東南アジアに拠点を置きつつ進められていた本格的な中国内地布教に向けた動きにも目を配りながら、草創期の中国プロテスタント史について俯瞰してゆくことを試みた。

第 2 章では本稿で中心的に扱う 2 つの開港場、香港と上海についてとりあげ、開港後の両地でのプロテスタント布教の状況を概観した。また併せてプロテスタント・キリスト教と密接な関わりを持った太平天国運動についても、キリスト教史の側から見て従来の太平天国史研究を補足できると思われるいくつかのトピックをとりあげて論じた。

次に、第 3 章では洪仁玕とキリスト教の関わりをテーマに、主に洪仁玕について述べている。洪仁玕のキリスト教受容の過程や、最初の南京行きの試み、ロンドン伝道会の助手としての生活などについて、バーゼル伝道会及びロンドン伝道会の史料を用いながら明らかにしようと試みた。また、ロンドン伝道会と洪仁玕の関わりについても、筆者の修士論文の成果をさらに補足しつつ研究を深め、さらに李正高や王韜など洪仁玕と親交があった信徒にも光を当てた。

第 4 章では、ロンドン伝道会の香港支部である英華書院と上海支部である墨海書館において 1850 年代に隆盛した出版事業に注目し、そこで展開された西洋の知識の伝播と開港場知識人の誕生について述べている。特に、洪仁玕にとっても西洋知識に関する情報源として有用だったと思われる 2 つの月刊紙、香港の『遐邇貫珍』と上海の『六合叢談』をとりあげ、そこに掲載された記事の執筆者や協力者に焦点を当てることによって、英華書院や墨海書館に集った「開港場知識人」たちの姿を明らかにすることを試みた。また、1850 年代後半に宣教師と中国人知識人とが協力して西洋の科学書の翻訳に尽力しており、そうした翻訳事業についても併せて言及した。とりわけ、墨海書館において長らく聖書・宗教書・科学書の翻訳や執筆で活躍した王韜にも注目している。

第 5 章では洪仁玕の代表的著作とされ、従来から太平天国の近代化綱領として高い評価を得てきた『資政新篇』をとりあげる。『資政新篇』執筆から間もない時期に宣教師によって書かれた英語の紹介文をもとにその刊行過程を追いながら、洪仁玕のキリスト教及び西洋知識の受容のあり方を検討し、また、『資政新篇』の内容に関する分析も行い、そこに反映された洪仁玕の知識の淵源を探った。

第 6 章では南京に到着し「干王」となった洪仁玕と宣教師との交流を軸に、1860 年から 1862 年にかけての太平天国をめぐる情勢の変化について概観した。1860 年は、太平天国が再び江南で勢力を拡大した年であるとともに、干王洪仁玕の出現によって太平天国と宣教師との交流が密になった年でもあり、他方、年末には第 2 次アヘン戦争が終結し、天津条

約が結ばれた年でもある。それから 1862 年の初めに太平天国と西洋諸国との関係の悪化が決定的となるまでの間に、洪仁玕に対する宣教師を含む西洋人の見方は大きく変容していった。本章では、洪仁玕との交流や交渉に関する報告や筆記、英字新聞の論評なども参照しながら、西洋人の目に映る太平天国像、洪仁玕像の変遷を明らかにしようとした。

第 7 章では洪仁玕と同時代を生きた開港場知識人に再び焦点をあてている。まず、太平天国と直接接触した数少ない開港場知識人の 1 人として王韜に注目し、キリスト教と距離の近かった開港場知識人の太平天国認識について検討した。さらに、太平天国後、清朝の洋務派官僚の幕僚として洋務運動の推進に当たった開港場知識人や、香港の中国人社会でエリートとして頭角を現した開港場知識人をとりあげ、その足跡をたどった。また 1870 年代に再び隆盛した宣教師による西洋知識の伝播にも注目し、洋務運動との関わりの中で論じている。

以上の考察を踏まえ、終章では結論として以下の 3 点について論じた。

まず中国における初期プロテスタント史に関して、宣教師の中国に対する態度、また科学知識の伝播に対する態度に関連して、例えば「用語論争」をきっかけに宣教師の側も中国の伝統的な思想や歴史に向き合い、理解を深めてゆく必要に目ざめていったことや、中国人知識人の数学のレベルの高さを認識したことが、西洋の科学書の翻訳が活発化する直接的な引き金となったことなどを指摘し、宣教師と中国人知識人とがどちらか一方的にではなく、互いに相手の文化や学術を学ぼうとする一面もあったことを指摘した。また太平天国とキリスト教との接点に関連して、1830 年代初頭の梁発による比較的自由な「中国人による中国人への」布教活動が、『勧世良言』の完成と配付活動に結びついていたことや、1840 年代にやはり「中国人による中国人への」布教を目標とした福漢会の活動が広西にまで及び、醸成期の太平天国運動への参加者を生んでいたことから、太平天国とキリスト教の関係を考える上では、宣教師以上に彼らのもとにいた中国人信徒の働きが大きかったことを指摘している。

次に洪仁玕と開港場知識人について論じた。洪仁玕については、キリスト教に対する積極的な態度がかなり早い段階から見えていたこと、また信徒となってからも宣教師から高い評価受けていたことを指摘したうえで、香港や上海で西洋知識に触れ、それを熱心に吸収しようとしていた洪仁玕を「開港場知識人」の中に位置づけることを試みた。「開港場知識人」の類型としては、筆者は、伝統的な中国式の教育を受けていたのか、あるいは西洋式の教育を受けていたのかという点と、キリスト教を受容したか否かという点を指標に、4 つのタイプを提示している。中国式の教育を受け、キリスト教を受容したタイプに洪仁玕は入るが、このタイプの知識人は、儒教的価値観も保持しつつ、よりすぐれた教え、道徳としてキリスト教を受容としていたことを指摘している。これは中国式の教育を受け、儒教的価値観を持つ、キリスト教を受容しなかった知識人たちが、キリスト教を儒教と対立するものと考え、退けたのとは対照的であった。一方、西洋式の教育を受けた知識人たちの場合、キリスト教の受容の有無は上記の伝統的教育を受けた知識人たちのような葛藤を

生じさせる問題ではなかったことも指摘している。そして、これらの知識人たちが洋務官僚の幕僚や香港の中国人社会におけるエリート層、あるいはジャーナリスト、キリスト教の伝道者など、さまざまな場面で活躍していったことを指摘した。

最後に洪仁玕と太平天国の位置づけについて論じている。『資政新篇』に見られる洪仁玕の改革方案は非常にキリスト教色の強いものであったが、これは宣教師がキリスト教と結びつけた形で西洋知識を伝え、キリスト教の伝道者であった洪仁玕も、彼自身のキリスト教信仰に基づいてこれらの知識を受け止めたからであって、この書物は、キリスト教と西洋の先進知識との強い結びつきをそのままに、それらを改革の理想として描き出したものであったことを指摘した。これはキリスト教とは一線を画した知識人たちの姿勢とは根本的に異なるものであったが、儒教に匹敵する価値をキリスト教に認めない士大夫層が支配する清朝においては、洪仁玕が提唱したようなキリスト教色の濃い改革方案が受けいれられる余地はなかったのであり、まがりなりにも「キリスト教」の影響下に成立した太平天国だったからこそ、そして洪仁玕が著者であったからこそ、『資政新篇』は世に出ることができたと考えられる。すなわち、太平天国－洪仁玕－キリスト教という 3 者のつながりの上に、『資政新篇』というキリスト教に根ざした「近代化」の試みは誕生したのである。